

戦後日本における零細小売業の存続と変容
—1950年代後半から80年代初頭を中心に—

本論文では、1950年代後半から80年代初頭にかけて、零細小売業がどのように外部環境の劇的な変化に適応したのかを、個々の零細小売業の経営行動と開業行動の視点から分析した。

序章では、本論文の課題と問題意識を説明したうえで、本論文の分析視角を提示した。

第1章では、1950年代後半から80年代初頭にかけて、零細小売業が存続できた外部条件を、小売市場の動向、都市化の進展、小売構造の変容という三つの側面から検討し、その変化について検討した。それによって、高度成長期における「市場スラック」の発生と、低成長期における「市場スラック」の縮小に伴い、零細小売業はこの時期に拡大と緩やかな衰退過程を経験したことを明らかにした。

第2章では、以上の外部環境の変化に対して、零細小売業はどのように対応したのかについて検討した。それによって、零細小売業は家族と家族財産（不動産）を活用し、家族内部の労働時間の配分、兼業・副業化、事業転換等によって外部環境の変化に柔軟に適応したことを明らかにした。この時期に、零細小売業に長く存続する商店が多く存在するのは、以上のような家族経営の経営行動と関わっている。

第3章では、1950年代後半から1980年代初頭にかけての、零細小売店主の開業行動について検討した。この時期の零細小売店主をその職歴から家業継承者、独立開業者、その他の開業者という三つの類型に分けてみると、それぞれの類型においては、職歴だけではなく、開業時のライフステージ、開業動機、開業業種の選択等において顕著な違いがみられた。そのうち、家業継承者と独立開業者は、開業行動と家族形成と大きく関わり、彼らは零細小売業を家族の生計を維持するための、一生の職業として開業する者が多い。このような「生業的」な開業行動は第2章で述べた経営行動と一致すると考えられる。高度成長期には、市場が拡大する中で、家業継承者と独立開業者の参入はまだ多かった。しかし、低成長期に入ると家業継承者と独立開業者の参入が少なくなり、1980年代以降の零細小売業の衰退につながる廃業率の上昇、後継者難等の問題は、すでにこの時期からはじまったといえる。

最後に、終章では、以上の各章の内容を簡潔にまとめ、今後の課題を提示した。